

仲尾次政隆の「配流日記」にみる旅歌

綱川 恵美

(国文学専攻博士後期課程三年)

はじめに

(1) 仲尾次政隆と研究史

仲尾次政隆なかおしせりやうは、浄土真宗の布教者としてよく知られている人物である。宇氏仲尾次政元の子として、那覇泉崎で、文化七年(一八一〇)に生まれ、明治四年(一八七二)六二歳で亡くなった。¹⁾ 仲尾次政隆に関する研究は、伊波普猷の「真宗沖繩開教前史―仲尾次政隆と其背景」(一九二六年)²⁾に始まる。伊波論文は、琉球王国時代の末期に禁制の浄土真宗を信仰した仲尾次政隆という人物の生涯と、信仰に基づく実践・活動に焦点をあてた著述である。仲尾次政隆の一生を明らかにしながら、琉球王国時代の仏教史を概観している。琉球の仏教史をいち早く取り上げた論文という面でも特筆すべきものである。その後は知名定寛が『琉球仏教史の研究』(二〇〇八年)³⁾でさらに琉球仏教史研究の中で、仲尾次政隆を取り上げている。沖繩の浄土真宗史にとって、仲尾次政隆という人物は極めて重要な人物であり、仏教史の中で名が知られている人物ともいえるだろう。

仲尾次政隆は浄土真宗を布教という理由で終身の流刑を課せられ、実際には十一年間八重山で生活した。その間の日記が「配流日記」である。翻刻は『仲尾次政隆関係遺品調査資料報告書』(一九七七年)⁴⁾に「配流日記 仲尾次政隆」(島尻勝太郎校訂、以下「配流日記」と略す)がある。なお、今回使用する「配流日記」の本文引用は、これをもとにしている。

「配流日記」の冒頭には、「日記の便りにもと折にあたり事にふれ、和歌も琉歌もつらねかゝりも心におもふまゝ、口に詠吟して書あつめ置ものなり、于時咸豊五年乙卯六月十二日より同治四年乙丑五月廿八日迄」とある。安政二年(咸豊五、一八五五)から慶応元年(同治四、一八六五)に至る十一年の八重山での配流生活中に詠んだ歌を書き連ねた歌日記ともいべきもので、一二六首の琉歌と、五四二首の和歌、計六六八首の歌が記される。ほかに、自作の散文(徒然のあまり花を活て詠るまゝ、記す)と「述懐口説」が所収されている。またもうひとつ八重山での生活を知る史料に「日誌」がある。翻刻は、『三国交流誌』(一九八一年)⁵⁾に所収の「仲尾次政隆翁日誌」

がある。これは安政二年六月から十二月までの日誌である。八重山に無期流刑となった仲尾次だが、八重山に赴くのは、安政三年十二月のことで、それまで約一年半は慶良間諸島に滞在していた。その慶良間諸島での出来事が仔細に記録している。

島尻勝太郎は、「仲尾次政隆の配流日記」（一九七七年⁶）という題で論文を発表している。仲尾次政隆という一信仰者の配流地における生活と、その時代と社会をみる資料としてとりあげており、文学作品としては深く論じられてはいない。「配流日記」は、文学のテキストとしてはおろか、島尻論文以降取り立てて論じられてこなかった。本論では、文学のテキストとして考察する試みとして、「配流日記」所収の歌、特に「旅歌」に焦点を当てて取り上げてみたい。

(2) 「配流日記」について

「配流日記」には、八重山での十一年に及ぶ滞在の中で、様々に歌が詠まれている。仲尾次の生活の様子が詞書と歌によってうかがえる。八重山に赴く前に一年半ほど滞在した慶良間や、八重山の民俗についても記すところがあり、近世期の慶良間や八重山の民俗がわかる資料としても重要である。例えば、平得村の綱引きと種取行事や、年中行事の物忌、登野城にある天川御嶽の祭の様子などが記されている⁷。赦免の重要なきっかけとなる宮良橋架橋についても知るることができる。

仲尾次は、当時の士族として高い教養の持ち主であった。琉球で歌人として知られる宜湾朝保について和歌を学び、書は久米村の儀間につき、弓は三司官の小祿親方につき、鋒は村山鍛三に伝授され、人相学、医術、風水、乗馬、土木、生花、茶道についても学んだといわれる⁸。日記中にはそれらの教養がよく表れている。和歌や琉歌の添削や相談役となり、交友を広げていたことが知られる。例えば、咸豊八年（一八五八）三月二十日の記事には次のようにある。

同廿日桃林寺へ御見廻に参しに焼酎差出れ四方山の嘯の中に和歌一首は何の題にてなれと読て見よと被仰ければはつかしくもありながら瑚堂長老の四字を上下の句に引きて

瑚ほこのみちある堂に引れきて 長く老いぬといわふ栄月（101）

桃林寺の瑚堂は、仲尾次が八重山に着いて一年後に、観音像を贈り、仲尾次の配流中を通して最も信仰的な支えとなった人物のようである。桃林寺に参詣した際に、和歌の題詠を頼まれて一首詠んでいる。また同年三月二十六日には、桃林寺から手紙と琉歌二首が送られてきたのでその返書に添えて琉歌を二首送っている。

琉歌 身は小舟こころ漕渡ち給ふれ いつも有明の月のことに（102）

琉歌 わみや浮小舟楫取やいつも 法の師のまかせおもて給ふれ（103）

八重山でも和歌・琉歌への関心は高く、様々な人物と和歌・琉歌を通じて交流があった。歌道の交流でいうと、桃林寺の住持から寄留の知識人、島の上級役人達、頭役や歴代の在番などが挙げられる。また仲尾次は「配流日記」の中で、「いろは雑歌」と題して、和歌四八首を詠んで収めており(387-434)、和歌への造詣の深さがうかがえる。同治二年(一八六三)九月十日の記事には島の女性たちについて次のように詠んでいる。

島後達こゝろの底は飛鳥川淵とみるまにはや瀬なりけり(469)

これは、『古今和歌集』第九三三番の歌に、「世の中はなにか常なる飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬になる」を引歌にしたものであろう。他にも和歌の教養をもって、撰取した歌も散見される。「人はいさ心はしるよ古郷の 花の匂ひのみにぞしみぬる」(430)という歌があるが、これは「人はいさ心も知らずふるさと花ぞ昔の香にほひける」(『古今集』春・42)を引歌として詠じたものであろう。

那覇士族として沖縄本島で暮らしてきた仲尾次にとって、八重山での暮らしは新鮮であると同時に、配流の身であることでの様々な思いが所々に表れ、それを歌で表現している。「配流日記」には、正月の祝儀や死者を弔う歌、念仏歌、疱瘡歌、教訓歌などさまざまな場面で歌がうたわれている。例えば、親類家族にあてた手紙のうち

に、「五男へ詠して与ふ」とし、次のような教訓歌を送っている。

琉歌 旅のつらさてやり徒に居るな 習ふへき事や余多あもの(331)

琉歌集等では、琉歌形式の教訓歌は多く詠作されている⁹⁾。また、逆に琉歌集等では「死」についてはあまりうたわれることはない。しかし「配流日記」では、死の場面に直面した仲尾次が歌を詠んで死者を弔う様子が多く描かれている。例えば、咸豊十年(一八六〇)四月二十九日の記事には、病気で養生していた木屋の「三ら」が亡くなったという知らせを受け、死者の枕元にて琉歌を詠んだ。

琉歌 旅の上の旅に渡てきやいるいか身 あたなちをてわみや百の
くれしや(161)

三らの野辺送りのとき、僧が経を誦誦し焼香する場面では、和歌を二首詠んでいる。

法の師の法の光にさそはれて しつゝ行よ法の都に(162)
涙川波は立ともさわくなに みのり船にとく乗りきて(163)

士族などの出自ではない無禄の死者などは、葬儀をすることが叶

わず、仲尾次を頼って来た者もいたようである。その際に、仲尾次は死者の枕元に琉歌を手向けることが「配流日記」中には多くみられる。それに反して、野辺送りのときなどに、僧が経を読み上げ、死者を送り出す際には和歌をうたうようである。

故郷を離れ、故郷やそこにいる家族を思い、心を慰めたのである。旅情のつらさを詠う歌はいくつも散見される。また仲尾次が往來する船に対して航海祈願をするいわゆる「旅歌」の類も多く所収されている。咸豊六年（一八五六）十一月十五日の記事は、いよいよ翌日の早朝に八重山に向けて座間味から出帆するとの知らせを受けるが、座間味島の宮を参詣して立願してから出帆することになったときには、次のようにうたっている。

^{琉歌} 初おひきゆひやする音や聞きをたん 　いつれゆるくとかた
て給ふれ（56）

^{琉歌} 明六ツには嘉例吉の御神 　拝て直乗の御願しやべら（57）
^{琉歌} あきや走ちひとよこめて真泊に 　つけてゆるくと祝ひしや
べら（58）

そして翌日の記事には次のようである。

同十六日五ツ時分われも与人とも一同座間味の宮へ詣て立願

して

^{琉歌} 真泊よかけて波路やすくと 　真とも風給ふれ御神おすじ
（60）

息子たちとの再会を約束し、一年半滞在した座間味の村人たちや息子たちの船送りを受けた。その時に「名残の涙を流して惣山当へ口達」した琉歌を次のようにうたう。

^{琉歌} 余り名残しやの云言葉しつまで 　涙もろとも別る心気（66）

いよいよ八重山に向けて出帆することとなった。その時の記事は以下である。

同十一月十六日九ツ時分古座間味の浦より如八重山出帆して
久場島の前まで行しか風向になり乗戻して同八ツ時分阿嘉泊
へ汐懸同十七日四ツ時分われも与人とも一同阿嘉の宮へ詣て立
願して阿嘉の二文字を上句頭に出して

^{琉歌} 阿きやからや風もまとも吹きつめて 　嘉例吉よ給ふれ御神お
すじ（67）

そして、十二月一日には、真泊に入津し、（60）で祈った真泊の御

嶽の神について以下のようにある。

同日酉過時分甥鉢嶺一同船下りして浜へ登らんとせるとき鉢嶺

より真泊の嶽はあれなる山なりと知せければ心中に伏し拝て

旅歌 真泊の御神御守よめしやうち 仰しや給ふれ御代のこしひ

(78)

これはほんの一例にしかすぎないが、出船、航海の時の祈願をうたい、無事に到着したことの喜びをうたう。また一方で家族との別れや旅のつらさをもうたう。仲尾次が八重山に滞在している間にも家族や知り合いが船路の旅に出るときには、このように歌をうたっている。例えば、仲尾次船（「わが船」）が那覇港に着いた面影を見て、「今比は那覇の湊にはや着て うしろやすくに祝ひするらん」(329) などとうたっている。

「配流日記」所収の歌の八割以上が和歌である。しかし旅歌を取り上げてみると、その多くは琉歌であることが確認できる。和歌でも琉歌とされるものも多かったが、琉歌を多くうたっているのは、琉歌と和歌の位相を考える上で重要な問題を孕んでいるように思われる。次に、「配流日記」所収の旅歌の表現について検討してみたい。

「配流日記」にみる旅歌の表現

(1) 旅歌について

琉球弧における旅というのは、海に繋がる船の旅が中心となる。それによって琉球における旅歌は、航海に関わるものが非常に多い。山内盛彬の『琉球王朝古謡秘曲の研究』には、首里城での饗宴が終わり退出する際に歌われた「旅御前風節」、家族縁者によってクエーナとともに歌われた「旅歌」の歌詞が記されている。これによると「旅歌」は、八八八六音の琉歌の詩形を持つ歌である。王府儀礼である「御茶飯ウチャファン」や、渡唐衆のある家で旅の安全を祈願する儀礼の中で、三味線とともに、琉歌がうたわれていた。池宮正治は、「旅歌三味線」というのは、かじやで風節で歌われる『旅の時』の歌^⑩である。といい、旅歌とは「旅御前風節」、「旅嘉謝伝風節」等をさすという。「旅嘉謝伝風節」の代表的な琉歌を以下に挙げる。

(A) たんちゆかれよしや撰て差召る 御船の繩取は風や真嶺

(本当に幸多き船出は吉日をお選びになさっている 船の綱をとって船出をすると順風の風が吹く)

(B) 一の帆の帆中吹つ、も御風 聞得大君の御筋御風

(一の帆の帆中を吹く包むような順風は聞得大君の霊力が吹かせる風である)

(A) は、村落でも広くうたわれ、旅の無事を予祝したウタである。王府儀礼の場では、綱作りに関連して、この旅歌をうたうことで旅の無事を言祝いでいるのだろう。(B) は、最高神女である聞得大君がうたわれている。聞得大君から地方のノロに至る神女たちは、琉球の各聖地(御嶽)などで琉球船の航海安全を祈願していた。神々への祈願者としてだけではなく、聞得大君は航海守護神そのものとしても崇敬され、このウタにはそれがよくあらわれている。

(2) 旅の祝いー「ダンジュ嘉例吉」

「配流日記」(321)の琉歌の詞書きには、同治元年(一八六二)六月四日仲尾次の四男が「春立船」で那覇に向けて出発していることが知られる。それに続いて、(322)は以下のようにある。

同六日四男の三かの祝ひしなから

琉歌願のこと風もまとも吹つめて たんしゆ嘉例吉と祝ふうれし
や (322)

「三日の祝い」の時に、うたつたとされる琉歌であるが、「たんしゆ嘉例吉」の句が出るのは、先に挙げた(A)である。(A)は、船旅の安全を願う船旅の琉歌として有名で、沖縄各地域で歌われるウタである。かじゃで風節で歌われる「旅の時」の歌で、琉歌集には

「旅御前風」や「旅嘉謝伝風」などとして集められているものの初めに歌われる。⁽¹⁾首里で旅の祝いをする女性たちの踊り「踊合」^{ウツクエ}でもうたわれ、王府の命を受けて旅立つ役人が王の饞別を受ける際に行われる王府儀礼(「御茶飯」)の中でもうたわれ、男女問わず広くうたわれていたようである。⁽²⁾王府儀礼の場では、綱作りの儀礼に関連して、この旅歌をうたうことで旅の無事を言祝いでいる。「だんじゆ」とは、「げにこそ」の意である。「だりじよ」「だにじよ」「だにす」が転訛して、「だんじよ」という副詞になったものである。「かれよし」はめでたいこと、あるいは縁起の良いことである。「嘉例」や「嘉例吉」を歌い込める表現は、琉歌には多い。末句にくる「風や真艦」は、その他の旅歌にも類型表現が見られる。

いかり引き乗せて本帆矢帆もたち いまるのかち歌へば風もまとも

いづれかれよしのお願ひかなしはとて かれよしのみ風まとも
おすさ

御祝日になれば押すかぜもまとも だんぢゆかれよしのしるし
さらめ

「艦」とは船の船尾のことで、「風や真艦」は、風が艦を押しして船を走らせるという意である。後ろから押す風いわゆる追風、順風を

願っているのである。「旅クエーナ」¹³⁾には、「み船や／うしじとうん
 ちゃんとう 組んでい合わち 結び合わち／真南ぬ風 まとうむ風
 ／京都まで 山城まで／みまぶように しるがように」(御船は、御
 セヂと御神と、組手合わせて結び合わせて、真南の風、真艦風を吹
 かせてください、京都まで山城まで、見守るようにそうするように)
 とある。首里の「踊合」でうたわれる「旅クエーナ」は、王府の命
 を受けて大和や中国に旅立つ人の、航海の安全を祈願するウタであ
 るが、その内容は、大和旅の拝命、ヲナリ神への航海守護の祈願、
 出発にさいして国王への報告、聞得大君の管掌する神々への祈願を
 謡い、さらに、那覇港を出て鹿児島に上り、無事沖繩に戻ってくる
 までのこと、国王への帰還の報告など、これから起こることを先取
 りしてその理想的展開を叙事的にうたいあげるものである。
 琉球では渡唐や大和行き、先島に行くときなど、旅の儀礼や行事
 がさまざまに行われていた。¹⁴⁾ 仲尾次の八重山での暮らしの中でも例
 外ではなく、旅の儀礼が行われていたことが知られる。そのひとつ
 に、旅人の安全を祈願して出発から三日目に行う「三日の祝い」の
 様子がうかがえる。「配流日記」咸豊十年(一八六〇)五月三日の記
 事には、以下のようにある。

同五月三日三男四男の三かの祝ひなれとも供屋まみまかりし
 て間もなければ祝ふことも難成只心願をして

けふはた、心のうちに祈るかな 三かの祝ひと人はするとも
 (177)

息子たちが出船して三日目に祝いをするべきなのだが、祝うこと
 が難しく、その日はただ心の中で願い、歌をうたったというもので
 ある。また、「配流日記」同治元年(一八六二)七月六日の記事には
 以下のようにある。

同日次男三男の三かの祝ひは五男木屋にてさせわれは宿にて
 宿主と兩人静に祝ひながら

おのことも船出してよりけふ三かの 祝ひて廻す走馬さかつき
 (330)

「配流日記」同治三年七月四日の記事には、「同日晩子とも三人の
 三かの祝ひに付女人ともは宿主の二番座借して例通祝ひさせわか宿
 にてはまつと石垣にや□田場にや供うしかめへ静ニ祝ひさせなから
 われは風の願いいたす」にあるように、「三日の祝い」は女性たちの
 行事であったようである。その時、仲尾次自身は「風の願い」をし
 ていたことが知られる。首里では旅人のいる家の女性たちが行う儀
 礼を「踊合」といい、「本土や中国などに、公用や商用で旅する人が
 ありますと、その家を旅衆(タビス)と称して、船出の日、船出か

ら三日目、当人の誕生日、入船の日などのほか、お正月や五月五日、九月九日などの祝祭日には、親類縁者、知人がその家に集まって、旅（航海）の安全を神仏や天地の靈に祈った¹⁵⁾という。旅人を送りだした家では、「船出の三日目」という記事と一致する。東恩納寛博は「旅衆船出の時はにぎやかに祝し、三日の間、畳を揚げ板敷の上にてくわいにやを唄ひ囃し立てる風習があった。板敷と云ふのは三日目の竟宴の事かと思われ¹⁶⁾」と注している。

「三日の祝い」を詠んだ琉歌には、「かれよしのお船やいとの上にはらち 三日のお祝山川港」〔琉歌全集〕一六四六）などがある。

「いと（糸）の上」は、海上が平穏なさまを、絹布を張ったさまに喩えたもので、船が絹布の上を滑るように航行してほしいと順調な航海を表す表現である¹⁷⁾。また、クエーナのうち、「ヤラシイ¹⁸⁾」には、「那覇港／親泊／しゆがけたさ／はいけたさ／出ち三日／走ち四日／やうらてやり／いそげてやり／唐土の／漢土の／親港／親泊／おしつけて／かけとめて」（那覇の港から出発して、出て三日走らせて四日で唐の港に着ける）とある。琉歌では、「那覇からや出じやち今日三日どなゆる 何時ぬ間に着ちやが山川港」〔踊合〕二八）などがある。実際に三日で着くというわけではなく、あつという間に着いてしまったことを三日と喩えている。はやく着くとうたうことで、つつがなき順調な航海を予祝する表現としてあるといえる。「三日の祝い」も、予祝的な意味合いを含んだ儀礼なのだろう。

③ 風の願い―「御筋御風」

当時の外洋航路は帆船であったから、風がいのちである。順風を願う「風の願い」の場面は「配流日記」にもみえる。同治元年（一八六二）六月二十七日に記事には、以下のようにある。

同廿七日御在番乗船源河船中立船兄大城船桃林寺御乗せん弟大城船医者御乗船わか船下小の船に一同風の願いたせるよし承りわれも心願して

琉歌 貢物運ふ船々よたいもの まとも風たほふれ御神御筋（323）
貢もの運ふ船よとわれひとの 急く心や神もしるらん（324）

「風の願い」は『琉球国由来記』に巻五「城中御嶽併首里中御嶽年中祭祀」「火神御前 首里殿内」の項（二四六頁）にもみえる¹⁹⁾。

風ノ御願ノ時、火ノ神前ニ、仙香壺結・御花壺・五水壺対皇大神所
特祭 供之、御崇仕也。座敷壺員、当員、筑登之壺員、冠朝服ニ
テ、三十三拜九拜也。

この記事は首里大あむしらの「風の願い」のようすである。公的な旅儀礼いわゆる渡唐儀礼のうちに「三平等之御立願」という儀礼がある。首里・真壁・儀保の三人の大あむしらが、渡唐する船

員を引き連れ、聞得大君御殿に参上して祭神を拝み、聞得大君より盃を頂戴して、旅の安全と祝福を受ける王国独自の宗教儀式が行われていた。『女官御双紙』には、「風吹んとする時、三平等の人数、聞得大君御殿へ参上、御願おかみ申」、「風の御たかへの事。唐行衆、倭行衆、先島在番、三平等之立願、結願之時、御殿の役人勤められる也。」とある。『聞得大君御殿并御城御規式御次第』「聞得大君御殿毎日之御たかへ」にも、「唐のいく船くる船、大和のいく船くる船、鳴々國々のいく船くるふね、おみへおまんち、みしやうち、おたへみしやうれ」と聞得大君が航海する船の安全を日々祈っていたことが知られる。順風をこいねがうことは、順調な航海と直結する。そのためにも神々に風の願いするのである。

先に挙げた(B)の歌は、船が琉球王国の最高神女である聞得大君の靈力に守られた順風を受けていることを歌う。聞得大君を頂点とする琉球王国の神女は、琉球の各聖地(御嶽)などで琉球船の航海安全を祈願するとともに、航海神としての側面を強くもっている。神々への祈願者としてだけではなく、聞得大君は航海守護神そのものとしても崇敬され、この琉歌にはそれがよくあらわれている。『おもしろさうし』にも、例えば、第十三―七六四には次のようにうたわれている。「一赤金が 船遣れ／げらへ 金富／大君に 真南風 乞うて 走りやに」(赤金さまが船頭をする、立派な金富(船の名)の航海だ。聞得大君に真南風を乞い願って船を走らせよう)と、聞得

大君に順風を願う表現がある。「真南風 乞うて 走らせ」や「吾守て 此の渡 渡しよわれ」は、航海に関わるオモロに多くみられる常套表現で、ヲナリ神に海上の安全、順風が吹くようにこいねがう表現である。また、風に関わる表現も様々にみられ、第十三「船ゑとのおもる御さうし」を中心に、航海に関わるオモロが多くあり、航海安全を祈ることはオモロの主要なテーマのひとつでもある。旅歌は主に儀礼の場で歌われる。これは池宮正治が「古謡にみられる、羅列や反復、常套句の多用、それは試験済みのマジカル・ラング(呪言)の使用であつた」と指摘する通り、霊験を発現させるために、常套句が重要なのである。「祭祀は、時間、場所、人、詞章などをつわば非日常化することで呪的な力を増加もしくは強化する装置とする。詞章はそれを、対語や対句、一定の音数の繰り返し(五音や七音など)、その他の言葉に音楽に取り込むかたちで非日常化する」という。「配流日記」の旅歌の場合、オモロ、クエーナ、琉歌の旅歌にみられる表現を背景にしながら、その常套表現を用いて琉歌を詠んだ。ただ、仲尾次が記す和歌の中に旅の祈願がうたわれていないわけではない。琉歌と和歌を同じ場面であうたう例も一例だけだがある(323、324)。

「配流日記」には(B)に類似した表現の歌に以下のようなものがある。

琉歌 ふさき走出は那覇湊さして 真ともからたはふれ御筋美風

(443)

琉歌 那覇の親泊さしてまんまとも 吹つめて給ふれ御筋美風 (573)

琉歌 川平より出らは那覇湊までも まんまとも給ふれ御筋美風

(579)

末句に「御筋美風」とでる表現が (B) と類似する。「美風」「御風」は「ミカジ」と読み、琉歌集によって表記にはらつきがある。「御筋」とは、御セジ(靈威、靈力) のことで、首里方言の「ウスイジ」にあたる。²⁴⁾ 神が吹かせる風という意味になり、風に接頭語が付いた「御風」となり、「美風」は当て字であろう。他に「御筋」をうたう琉歌の例としては次のようなものがある。

(C) 御船の高艫に白鳥がみちやうん 白鳥やあらぬ思姉おすじ

(D) 聞得大君のおすちお光に 旅の道ひろく行きやり来ちやり

(E) 嶽々のおすち寺々の仏 お守りよめしや里前つじ上

(C) では女兄弟(ヲナリ)が、男兄弟(エケリ)を白鳥の化身になって守護するというヲナリ神信仰があらわれている。(D) は (B) に関連した歌で、聞得大君の靈力によって旅の行き来が守られることをうたう。(E) は、御嶽の神々、寺の仏などさまざまな神に男性

の旅の安全を願ううたである。旅の祈願はヲナリ神だけでなく、様々な靈所に参詣していることがうかがえる。「配流日記」の中で仲尾次がヲナリ神をうたう歌はない。『おもろさうし』第一三一九〇六「しよりゑとのふし」には、「一辺留の子が 船遣れ 親御船は 押し浮けて 浮ける数 せぢ 添わて 走りやせ」とある。セヂ(靈力)を添えて帆走させるとし、神の靈験によって海上の安全が保証されるということがよく表れているといえよう。

「配流日記」の同治元年(一八六二)七月四日の記事には以下のようにある。

同四日四ツ朝時分得元長老御乗船并下小の船出帆西時分わか
船出帆次男三男も乗合して罷登ければ旁心願して

琉歌 那覇の親泊さして嘉例吉の まとも吹つめる美風たはふれ

(327)

琉歌 那覇の親泊さして一の帆の 帆中吹つ、む美風たはふれ (328)

(327) は「嘉例吉」、「真艫」といった旅歌によく出る表現を用い、(328) は (B) の琉歌の類歌といえるだろう。末句に風を乞い願い、これもまた「風の願い」の表現である。咸豊六年(一八五六)十一月一六日の記事には次のようにある。

同十六日五ツ時分われも与人とも一同座間味の宮へ詣て立願して

真泊よかけて波路やすくと 真とも風給ふれ御神おすじ
(60)

最後の句が「御筋美風」に類似しているが、「御神御筋」として「御神」は、首里方言「ウチャン」にあたる。⁽²⁵⁾「配流日記」のうち、他の「御神おすじ」の用例を次に挙げる。

阿きやからや風もまとも吹きつめて 嘉例吉よ給ふれ御神おすじ (67)

波路やすくとまとも風添て 嘉例吉よたふれ御神御筋 (321)

貢物運ふ船々よたいもの まとも風たほふれ御神御筋 (323)

時津風しつめ波おた、なくに 船守て給ふれ御神御筋^(住吉の神) (44)

真とも押すみ風吹続きく 嘉例吉よたはふれ御神御筋 (442)

この旅や猶も御守よめしやうち たしけやりたはふれ御神御筋
筋 (445)

くりかえしく 那覇湊さして まとも風たはふれ御神御筋

いつも旅の空風と道たひもの まともから給ふれ御神御筋
(446)

(575)

末句「御神御筋」とうたう表現は他の琉歌にはなく、仲尾次が典型的に好んで「御神御筋」をうたっていたことがわかる。そして先に挙げた八例のうち六例が、真艦の風をうたっている。クエーナの「34ヤラシイ」には「いびの森／つかさ森／そのひやん／かねひやん／おすぢと／御神と／くんであ、ち／むすびあ、ち／あそぶさ／踊ゆさ」(イベの森、司森、園比屋武、金比屋武の御スヂと御神と組手を合わせて、結び合わせて遊ぶよ、踊るよ)とあり、「おすぢ」と「御神」が対句になっている。

真艦の風をうたわない(44)の例は「時津風」とうたう。その詞書には「同(同治二、一八六三年)六月九日七ツ時分より風荒波立入相時分よりは猶強くなりければ船の為に夜終心願して」とあり、「時津風」を鎮めて、波を穏やかにし、船をお守りくださいとうたっている。このときに、「住吉の神」と傍記されていることは興味深い。「住吉の神」については後述するが、琉歌の中で「住吉」がである例はこの一例のみである。

「配流日記」中の琉歌で、末句に「御筋美風」または「御神御筋」とうたう十三首の詞書をみてみると、その全ては「立願して」もしくは「心願して」というときにうたわれている。琉歌は抒情歌としてのみ存在するわけではなく、王府儀礼においても、また村落の儀礼や家の行事の場においても、儀礼歌としての側面を持ち合わせている。祝いの歌の代表的な嘉謝手風節や、航海安全を予祝し

て歌う旅嘉謝手風節、稲の豊穰の祝い歌として歌う作田節さくせんなどが儀礼の歌としてうたわれていた。「配流日記」のこれらの歌も特定の場面であつたわれる儀礼歌の側面が強く表れているといえよう。

まとめにかえて―和歌の旅歌

「配流日記」で風を歌うのは琉歌ばかりではない。和歌でうたわれた「追手の風」、「追風」の例を挙げてみる。同治元年（一八六二）七月二日の記事には次のようにある。

同七月二日屋嘉公外間公追々御出帆可被成と暇乞の御心にて御出被成ければ難有のま、

祈るそよ追手の風をミヤこまで 波路もやすく神や守らん(326)

また同治三年（一八六四）五月十九日には以下のようにある。

同五月十九日晚吉元の仮屋にて医者高良氏とわれと三人して
与儀公与那嶺公催上名残御嘶して

真帆引は追風添て行道の たむけの神も守りますらん(549)

後ろから吹く風を「追手の風」「追風」とうたっている。「配流日記」で、他に「追風」が出る用例を次に挙げておく。

真帆引は追風添て灘やすく 三かの祝い那覇てめすらん(551)
川平より那覇の入江といとはへて 追風たへよ住吉の神(576)
かけまくもかしこき神の恵ミより やかて追風あると覚ゆ(584)

オモロでは「おいちへ」、「おゑちへ」、「おゑち」、「おいちゑかぜ」という表現がある。例えば、『おもろさうし』第一三―一八四は「まはな真南風 まはな真南風／やおら お押せ／こがわくち金口 は走りやさ／又追手 おゑち追手／やうら お押せ」とうたう。「ちへ」は「て」の口蓋化したものだが、「ち」は「ちへ」がさらに変化したものである。「て」が「ち」まで変化した例は珍しい。「て」は日本語の「はやて」（疾風）の「て」と同じく、もともと風を表している。「おいちへ」は日本語の「おひて」（追風・追手）と同源であろうと池宮は指摘している。²⁷⁾琉歌で「追風」や「追手の風」といった表現であつた例は見られず、琉歌の場合追風を表す言葉は、鱧を押す風の意の「まとも風」である。⁽⁵⁷⁶⁾にうたわれる「住吉の神」とは、航海の神である住吉信仰をうたつたものである。沖縄本島の小禄間切儀間に住吉神社がある。屋良座森グスクの東南にあり、航海安全の神として祈願される場所であつた。近世の渡唐役人が記した公務日記『田里筑登之親雲上渡唐準備日記』⁽²⁸⁾には公的な儀礼である「風之御立願」の日の晩、船員と家の女性を連れて、小禄の住吉に詣でることが知られる。

今日旅御船例之通風之御立願仕候段大宿より兼而触有之候付五ツ時分御船江乗付色衣帽子ニ而御船菩薩江三跪九叩頭之拜礼兩度相勤其外怡山院宮之上舍人廟尚書廟四ヶ所江御船菩薩御取次ニ而三跪九叩頭之拜礼壹度ツ、相勤羅帰候事
 附晚方王舅大夫御始兩艘役者中先例之通弁当壹組ツ、持參女列ニ而住吉江差越相祝候也

ここでいう「菩薩」とは、中国で航海を守護する神の媽祖まそのことである。公的な渡唐儀礼の「風之御立願」では、媽祖に航海祈願を行っている様子がうかがえる。そのような公的な儀礼の日と同日の晩、船員と家の女性たちが航海守護の加護がある寺社に詣でるのである。そのような儀礼を表すものとして、琉歌にもうたわれている。

屋良座住吉や 風のだいもの 真鱸風たばうれ いびのおすぢ
 (屋良座と住吉は風の神である。どうか順風をください、イビの神様も)

屋良座森グスク、そこと渡唐船を造るスラ場との中間の小高いところに住吉神社(住吉大明神)があった。また、屋良座森と住吉との間に拝所のイビがあり、このあたりを「イビの前」といっていた。つまりこの三ヶ所の神に順風を祈っている。²⁹⁾(576)は、八重山から那

覇に向けて航行する際に、那覇の住吉の神に追い風を祈っていることがわかる。ここでは琉歌ではなく和歌の中で「住吉」とうたわれている。

住吉神社は、もとは撰津国に総本社があり、住吉信仰は日本全土に広がっている。海の神としての信仰があり、古くから航海関係者や漁民の間で、靈験あらたかな神として崇敬されてきた。奈良時代、遣唐使の派遣の際には、必ず海上の無事を祈ったという。『万葉集』にある「住吉すみのえに齋いつく祝はふりが神言かむことと行くとも来とも船は早けん」(住吉の社にお仕える神官のお告げでは、行きも帰りも船は速かろう)と詠まれるこの歌は、住吉大神の言葉として、遣唐使に対し無事の帰還を約束した神のお告げを伝えたものである。このような海上安全の守護としての信仰は、江戸時代、海上輸送が盛んになるとともに、運送船業の関係者の間にも広がっていたとい³⁰⁾う。

断片的ではあるが、仲尾次政隆の「配流日記」における旅歌の諸相を考察した。所収の歌の八割以上が和歌である。しかし旅歌を取り上げてみると、和歌でも旅歌は歌うが、琉歌を多くうたっていることがわかる。琉歌と和歌の位相は、さらに検討していく必要がある。

注

- (1) 『宇姓家譜 大宗 仲尾次家』那覇市歴史博物館蔵。
- (2) 伊波普猷「真宗沖繩開教前史―仲尾次政隆と其背景」一九二六年初版。復刻が同題で、榕樹書林二〇一〇年刊。
- (3) 知名定寛『琉球仏教史の研究』榕樹書林、二〇〇八年。
- (4) 『仲尾次政隆関係遺品調査資料報告書』(沖繩県文化財調査報告書第八集 昭和五十一年度歴史調査資料) 沖繩県教育委員会、一九七七年。「配流日記」の和歌・琉歌は本資料から引用し、ウタ番号もこれに依る。
- (5) 島尻勝太郎、中村栄孝、谷川健一編『三国交流誌』日本庶民生活史料集成第二七卷 三一書房 一九八一年。
- (6) 島尻勝太郎「仲尾次政隆の配流日記」『沖繩文化研究』第四号、法政大学沖繩文化研究所、一九七七年。のち『近世沖繩の社会と宗教』(三一書房、一九八〇年) 所収。
- (7) 島尻、注6前掲書、八五頁。
- (8) 伊波、注2前掲書、四一頁。
- (9) 外間守善、仲程昌徳『南島抒情 琉歌百選』(角川書店、一九七四年、一九四頁)。
- (10) 池宮正治「渡唐船の準備と儀礼」(『琉球史文化論』笠間書院、二〇一五年)、五四二頁。
- (11) 例えば、『琉歌百控』、若樹文庫旧蔵本『琉歌集』の「旅の時同節」(同)かぎやで風 筆者注) などがある。また沖繩県立図書館蔵比嘉春潮文庫に『旅歌集』がある。
- (12) 拙論「渡唐儀礼とウタの場―男女の視点から」(古橋信孝、居駒永幸編『古代歌謡とはなにか』二〇一五年)。
- (13) 外間守善、玉城政美『南島歌謡大成Ⅰ 沖繩篇上』角川書店、一九八〇年。
- (14) 真栄平房昭「近世琉球における航海と信仰―「旅」の儀礼を中心に」(『沖繩文化』第二八卷一号 沖繩文化協会 一九九三年)、拙論「渡唐儀礼と旅儀礼」(『琉球―交叉する歴史と文化』勉強出版 二〇一二年) など。
- (15) 見里春『踊合』文唱堂、一九七六年。
- (16) 池宮、注10前掲書、一八七頁。
- (17) 前城淳子「琉歌(旅歌)の諸相」(『日本東洋文化論集』第十五号 琉球大学法文学部 二〇〇九年)、六七頁。
- (18) 外間守善、玉城政美『南島歌謡大成Ⅰ 沖繩篇上』角川書店 一九八〇年。
- (19) 外間守善・波照間永吉『定本 琉球国由来記』(角川書店、一九九七年) 一四六頁。
- (20) 小島瓊禮『神道大系 神社編五十二 沖繩』神道大系編纂会 (一九八二年)、二七一頁。
- (21) 島村幸一『コレクシヨン日本歌人選 おもろさうし』(笠間書院、二〇一二年)、八二頁。
- (22) 池宮正治「おもろさうしにおける航海と船の民俗」(『琉球文学総論』笠間書院、二〇一五年)、二五九頁。
- (23) 注22に同じ。
- (24) 国立国語研究所『沖繩語辞典』大蔵省印刷局、一九七五年。
- (25) 注24に同じ。
- (26) 島村幸一「儀礼歌としての琉歌」(『おもろさうし』と琉球文学』笠間書院、二〇一〇年)、六二二頁。
- (27) 池宮正治「やうらやうら風よ(卷二二の七七)」(『おもろさうし精華抄』おもろ研究会編、ひるぎ社、一九八七年)、三四一頁。
- (28) 渡名喜明「資料紹介 田里筑登之親雲上渡唐準備日記(一)」(『文化課紀要』第一号 沖繩県教育委員会文化課 一九八四年)
- (29) 池宮、注10前掲書、一八五頁。
- (30) 真弓常忠『住吉信仰―いのちの根源、海の神』朱鷺書房、二〇〇三年。